

## 総合的な探究の時間における生徒の経験

### —SCAT による分析を通じて—

宮脇 祐貴 教職基盤形成コース 教育課題探究プログラム

キーワード：総合的な探究の時間, SCAT

#### 1. 問題の所存と研究の目的

平成 30 年高等学校学習指導要領改訂に際して、「総合的な学習の時間」から「総合的な探究の時間」に名称が変わった。「総合的な探究の時間」に関する研究では、自校の探究活動を教師が振り返りながら考察する研究はみられるが(山本, 2018, 島崎ら, 2020)、生徒の実際の探究の経験を質的に分析したものは管見の限り見当たらない。探究学習を理解するためには、生徒の側から探究を捉えることが必要なのではないか。本研究は、生徒の語りから「総合的な探究の時間」における探究の経験を明らかにすることを目的とする。

#### 2. 研究方法

##### 2.1 インタビュー調査

本研究では、X 高校の生徒を対象としてインタビュー調査を実施した。X 高校では、2019 年度より NPO 法人青春基地と連携協定を結び、学校と NPO が協働して「総合的な探究の時間」の授業づくりに取り組んでいる。X 高校の「総合的な探究の時間」の 1 年間の大まかな流れは右の表の通りである。

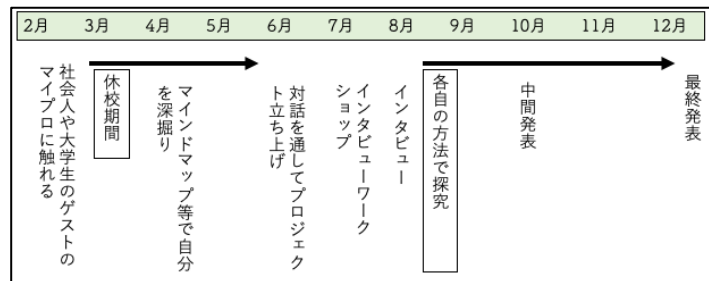


図 1 X 高校の授業の流れ

インタビューは半構造的インタビューを実施し、内容に関しては、探究テーマに至るまでの経緯、探究の授業内外で考えていたことや行ったこと、また他の生徒、教員、NPO のメンバーなどのかかわりに関して中心的に聞いた。

##### (1) 実施時期・場所

2021 年 7 月下旬から 2021 年 10 月上旬にかけて順次実施した。1 人あたり 90 分程度の時間で、B さん以外はオンラインインタビュー、B さんは X 高校にて対面で実施した。

##### (2) 研究協力者

インタビューの対象者は、2020 年度に「総合的な探究の時間」を履修し、生徒と教員の投票により選ばれた分野代表 11 プロジェクトの中から、インタビューに参加可能であつ

た4名である。(グループで探究を行っていたプロジェクトに関しては、メンバーの内1人に対してインタビューを行った。)

表1 研究協力者一覧

協力者	探究のテーマ	探究形態
A	色と形の印象	個人探究
B	空耳英語の仕組み	個人探究
C	子どもとスポーツ	個人探究
D	一人ひとりのタイプを知って対策を考えよう	グループ探究(2人)

## 2.2 分析方法:SCAT

分析は質的分析法である SCAT(step coding and theorization)を用いて分析した。SCAT はインタビュー調査で得られたデータを<1>データの中で着目すべき語句、<2>それを言いかえるためのデータ外の語句、<3>それを説明するための語句、<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念の4ステップでコーディングし、その結果であるテーマ、構成概念をストーリーラインで記述し、理論化を行う研究方法である(大谷 2011)。SCAT は少量データの分析に適した方法であり、また分析方法が明示されているので、この方法を採用した。

## 3. 結果

SCAT で抽出された概念から考察した結果、以下3点が明らかになった。

### 3.1 探究における不安感

A さんからは【インタビューへの不安感】、【ファーストアクションへの悩み】、【自身での調査の不足感】、B さんからは【自身の英語の知識による自己探究の限界の自覚】、C さんは【実践の学びと進路の接続の難しさ】、【インタビューのアポイントを全て自分で行う大変さ】、【自身で探究を進めることの大変さと面白さ】、D さんは【他のプロジェクトのつながりのなさ】、【相談機会や対話機会のなさ】、【自分たちだけで進める不安感】などが挙げられ、探究を行う中でみられる不安感がみられた。

【インタビューのアポイントを全て自分で行う大変さ】【インタビューへの不安感】【自身での調査への不足感】など、探究を進める中で生徒はインタビュー活動、インターネット等を活用した情報収集、発表活動など、それぞれの学習活動に対して緊張感や不安感を抱いている様子が見られた。また、【ファーストアクションへの悩み】【自身の英語の知識による自己探究の限界の自覚】【自身で探究を進めることの大変さと面白さ】【実践の学びと進路の接続の難しさ】【自分たちだけで進める不安感】など、探究の意思決定や考察に関して、自分自身で選択しながら進めることに対しての不安感も見受けられた。

### 3.2 人やことへの出会いとそれによる探究過程の変容

Aさんは高校2年次の探究の授業で、はじめは【アニメの日米比較】を検討していたが、【将来に関係するテーマの方が良いというゲストのアドバイス】により【進路と無関係の探究テーマ】である【アニメの日米比較】ではなく【進路と関係のある探究テーマ】である【ヘアメイクアップアーティストに関する探究】の選択に至った。Bさんははじめ【カエル化現象という心理現象の不思議さへの興味】から【心理などの進路と無関係の探究テーマ】を検討していたが、【上級生による進路関係の探究テーマのすすめ】を受け、1年次授業の産業と社会で【教育学部や英語への興味】から【信州大学オープンキャンパスへの参加】した際に【発音の規則性への気付き】を受け、【空耳概念への知的な感動と感化】をうけたことを思い出し、【進路と関係のある探究テーマ】である【空耳英語に関する探究】を行うことを選択した。Cさんは【スポーツと歯の関係の探究という、自身の部活動の陸上と自身の希望職業である歯科衛生士を掛け合わせて探究していた部活の先輩】の影響で、【陸上と保育士を掛け合わせた探究の選択】に至った。

また、Aさんはサロン経営者に対するインタビューで、【専門的な知識を持つ専門家への尊敬】が生じたり【仕事内容の理解】が進んだりした。また、その後メイクをする機会があり、Aさんは【メイクの難しさの実感】を感じる体験となった。探究を通してBさんは【発音記号の理解や英語の音に対する音声学的理解の深まりの自覚】が見られた。また、【他の生徒からの動画配信サイトの空耳動画の分析の提案】をうけ、それがその後のアクションにつながった。さらにBさんはもっとも印象的だったこととして、【専門家であるT教授との出会い】を通じた【多くの新情報による驚きと知的興奮】を挙げた。Cさんはインタビューを通して【体の発達と心の発達の関係の観点の獲得】や【スポーツと親の関係の観点】、【個人競技とチームスポーツの観点】など、【新たな観点の獲得】がみられた。

テーマ設定の際には様々な探究のテーマが見られ、それらは他者の言葉などの影響を受けながら選択される。また、インタビューや普段の友人との関わりなどによって、探究の新たな視点を獲得していた。そのように探究の中では、他者やものとの出会いによって探究の進路が変わっていくことがみられた。

### 3.3 学びの接続

Aさんのサロン経営者に対するインタビューでは、主に顔型と似合う色の関係を知りたかったが、保湿のことなど、【期待とは異なる情報】が多い回答だった。しかしその後、メイクについて理解を深める中で、メイクの土台となる肌状態の重要性に行きつき、保湿の大切さを再認識した。保湿に関する情報はインタビュー当時は【期待とは異なる情報】として捉えられていたが、後にその価値が位置付いた。また、看護師を将来の職業に考えていたDさんにとって、直接的に関係しない今回の探究は、【自ら答えを作る力の成長】や【目の前の人の様子を感じての関わり】などの点で【医療分野へのつながりの実感】がみられた。

出来事に出会った段階ではその価値を見出せなくとも、その後その価値を再認識する様子や、探究を通して経験したことや学んだことが、自身の進路といった別のテーマ・分野にもつながってくる様子がみられた。

#### 4. 総合考察

4 人の語りから、探究における不安感を抱いていること、人や物事への出会いとそれによる探究過程の変容したこと、学びが後から位置付いたり、他分野とつながったりするなど、学びの接続が起きていたことの3つの探究の経験がみえた。その背景には、探究という学びの探索的で不確定さがあるのではないか。探究が探索的で不確定だからこそ、インタビューや情報収集など、どのような結果がくるか分からない中で行動することや、自分自身で行動を選択することに不安感を覚える。探究が探索的で不確定だからこそ、学びの中で出会う人や物事によって、その後の探究は自然と変容してくる。探究が探索的で不確定だからこそ、学びが時間を経て位置付いてきたり、他分野へのつながりができる余白が存在したりするのではないか。言い換えるなら、探究の探索的で不確定さがあることで不安な側面もある一方、その不安な部分があるからこそ、学びの広がり・つながりの可能性があるという二面性も見受けられた。

#### 5. 終わりに

インタビューを通して生徒の探究と改めて向き合っていくと、その探究が、授業内だけではなく、授業外、そして学校外の生徒の人生の出来事や思いの上で浮き上がり、位置づいていることがわかった。インタビューからは、生徒ひとり一人がそれぞれに学びを位置付けている姿に触れることができた。探索性と不確実性が学習者のストーリーと学びつなげるものであるとすると、学びにおいては、学習者それぞれのストーリーが接続されるよう、授業の中に余白やあそびを取り入れながら子どもたちと共に学びをつくっていきたい。

#### 参考文献

- 文部科学省 (2018). 「高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)」
- 文部科学省 (2018). 「高等学校学習指導要領解説『総合的な探究の時間』編」
- 大谷尚 (2011). 「SCAT : step cording and theorization -明示的な手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法-」日本感性工学学会, 10 (3), 155-160.
- 島崎英夫・高崎耕一・河田良子・中川理恵 (2020). 「社会に開かれた教育課程と『総合的な探究の時間』の試み -大阪府立生野高等学校『文系探究』における高大連携-」教育実践研究, 14, 15-26.
- 山本明利 (2018). 「高等学校の『総合的な探究の時間』をどう指導すべきか」北里大学教職課程センター教育研究, 4, 17-31.